

# カタルーニャ・クロッシング

カタルーニャと日本。人や企業、そして芸術、生活がクロスする現場を探ります。

第21回 星川 弘光さん 花王ケミカルヨーロッパ社長

## 「仕事のしんどさを和らげてくれる 人と天気と食があります」

今回のインタビューは久しぶりにビジネスの現場でのクロッシングにスポットをあててみました。  
生活者向けの日用品でおなじみの花王さんですが、一方の柱にケミカル製品を他企業に供給するという  
B2Bのケミカル事業をお持ちです。カタルーニャには1970年代に進出されています。



AMICS 最初に星川さんの略歴とお仕事を教えてください。

星川 1993年の入社です。入社時点では「花王」ですから馴染みのある日用品、化粧品を担当するのかと思っていましたが、配属はケミカル部門になりました。理系出身の方が多い部門ですが、私自身は「ど文系」で販売・営業をずっとやってきました。マニラ、上海、シンガポールと駐在を経験し2024年の1月にバルセロナに着任。これまでのアジアとは違う商習慣になれるべく活動中です。

花王のケミカル事業というのは自社の日用品・化粧品の原材料供給を担う一方で、競合他社も含めた数千の会社にも原材料を販売するという裾野の広いビジネスです。代表的な製品はパーム油、ヤシ油などの天然油脂を素材とする界面活性剤ですが、これは油と水の間などの異なる物質が混ざり合わずに接している面(界面)

に作用し、乳化、分散、潤滑、洗浄といった機能を持たせるものです。例えばスキンケアでは汚れを落とす、クリームを混ざった状態に保つ、また、肌に浸透するというような役割を果たします。

花王グループでは、天然油脂原料からの一貫生産で、サステナブルなケミカル製品を数多く生み出し、オレオケミカル(油脂製品)分野では世界のリーディングカンパニーのひとつとして大きな地位を占めています。バルセロナにある花王ケミカルヨーロッパ(KCE)はケミカル事業のホールディングカンパニーでして、スペイン、メキシコ、ブラジル、ドイツの4カ国に5社の事業会社を抱えています。

AMICS カタルーニャ進出は1970年と日本企業の中では古参ですね。なぜバルセロナに着目されたのでしょうか

星川 花王自体は1887年に石けんの輸入販売からスタートした会社ですが、1960-70年代に日用品ビジネスが海外に進出したのに伴って、ケミカル事業も海外進出を含めたビジネス強化の機運が高まってきました。当時、脂肪系アミンという化学製品を扱っていたシロギャンというカタルーニャ企業が花王の技術に注目して声をかけてくださり、ジョイント企業をカタルーニャで設立したのが1970年。その後、買収・統合を経て1999年にホールディング会社という現在のKCEの形になりました。

AMICS バルセロナという地のビジネス戦略的価値というものがあるのでしょうか、直接的には企業同士の出会いだったということなんです。ビジネス現場でカタルーニャを実感されることがあります。

星川 従業員はKCE全体で1100人、スペインだけでは630人ほどですが、自分の周りのマネジメントたちはカタルーニャ人です。皆自分自身の出自がカタルーニャであること、そのアイデンティティとプライドを持っていて、それを前面に押し出し、隠さない。日常会話は主にカタルーニャ語。社内のキャンティーン(食堂)のメニュー表示もそうだし、街中でもスペイン語よりカタルーニャ語が上にあ



カタルーニャ、オレッサ工場全景



る事が多い。カタルーニャ料理であってスペイン料理とは絶対に言わない。「カタランですけどなにか!？」です。いろんな国を回って思うのは、追い詰められた時、土壇場になった時に我々はコッチを選ぶという芯を持っている人たちはやはり強いなという事です。

仕事現場ではその芯の強さの一方で、しなやかなイメージを抱かせます。ダイバーシティへの対応力というか間口の広さですね。異なる意見を調整してくれているように見えて、実は自分の意見を通して、しなやかに誘導していくのがうまい。事業会社が4カ国にまたがっている組織ですから、いろんな立場・見方での発言が飛び交うシビアなミーティングの中で意見をまとめるためには、このバルセロナのメンバーがヘッドクォーターにいてとても機能しています。あくまで、私の印象ですが、納得するまでは妥協はしない、信念をつらぬくドイツ系。面子と利害調整のバランスを探りながら議論を進めていくのが上手な中華系。その中で「なんでもいいですよ、みなさんおいで」と言いながらうまく結論へ持っていくカタルーニャ。私も人と争うのが苦手な性格なので、そんなバルセロナのスタッフの進め方はとてもマッフルしているんです。

AMICS いろいろな国でビジネスをされてきたからこそ星川さんに見えてくる場所があるんですね。コントラストが見えて面白いんですね。さて、星川さんのカタルーニャライフはどんな感じなのでしょう。地中海に面している良さは感じますか?

星川 シンガポール、上海時代に続き単身で来ています。休日は日本人駐在員の仲間とのゴルフ会だったり、こちらではマラソンも人気があるようでチャレンジしはじめています。数日間の休みがあったりすると旅行も。ただ基本的にはおじさんの一人暮らしですから、それほどエキサイティングなことは起きず、慎ましやかにやっています。笑。



昼食は社内のキャンティーンで

食事は昼間は自社のキャンティーンで食べますが、夜は外食が多いです。お客様との会食に加えて、ここは出張者が多いものから、彼らとの会食もかなりの数になります。いや、とにかく美味しいんです!なにを食べても美味しいんですよ。海鮮も肉も。異国の地で何の文句もないほど美味しいものがあるって言うのはなにもにも代え難いですよ。ここに来る出張者で「星川さん、日本食にしてください」という方は一人もいませんから。他の国にいた時には「今日は日本食をお願いします」と言うのが多かったです。笑。

バルセロナではそれが魅力だったり、わたしの今の立場では一つの武器になるんですね。大事な方、キーマンをお呼びして、バル

セロナさらにはKCEのファンになっていただく。この地の特徴を最大限に利用させていただいています。

先日、市役所の方からお聞きしたのですが、バルセロナの人口の1/4が外国籍、300の言語が交わされて、毎年5000万人が出入りする、大学生も30万人、グローバルタレントを集めるというアトラクティブな都市ランキングでは世界のトップ10に入るそうです。人材が揃っているんですね。年間に300日は晴れていて、美味しい食があるという地の利を考えれば人が集まって来るのもうなずけます。

AMICS 4月23日サン・ジョルディの日をご存知でしたか。まだまだ日本では知られていないんですが、世界的に見て素敵な習慣です。

星川 1月に着任したので、今年の4月はまだ何も知らずでしたが、なんでバラを売ってる少年がたくさんいるのか?疑問には思っていました。後で聞いてそういう日だったのかと。私の母方の実家が生花店です。花には敏感ですし、花をもらったり送ったりというのはとてもポジティブなんです。もちろん異国の地でバラをあげる相手なんかいませんよ。笑。でも男性社員には、日頃世話になっている女性社員にバラをあげるというマメな方もいますが、大抵は自分の奥様にということではバラを買っていましたね。スタッフの女性は毎年一冊ずつ本を息子にあげていて、息子は何年のサンジョルディの日にももらったとコレクションしているそうです。家族の歴史になっていくんですね。そういうのはいいなあと思います。

AMICS このカタルーニャ、バルセロナという地は星川さんにとってどんなものになっていくのでしょうか。

星川 食よし、天気よし、人よし。今のビジネス環境は厳しいですが、この街に暮らすということでは癒されています。絶賛頑張り中がスペイン語ですね。スーパーのレジでは必ずHola!と声をかけられるし、住んでいるPiso(マンション)のエレベーターの中でもほぼ100%です。Hola!に返せないとき沈黙の時間がくる。他の人がHola!の後もベラベラと話が続けるのを見ると、つくづく会話を楽しむ文化があるんだなあと思えます。日本ではありえない。とても健全、実に人間的です。この対話のコミュニティーになんとか入っていきたい。これをもっと味わえるようになるのが目下の目標です。

日系企業の駐在員の集まりで水曜日というのがありますが、「バルセロナでよかった」の声が多いです。こちらの駐在期間が終わっても、別の企業でバルセロナに残ったり、なんとかバルセロナに戻ってきたいという人も。会員には結構女性が多いですね。日本人会という集まり一つとっても形骸化せず、みんなで作り上げようという感じで活性化しています。規模が違うので一概に比較できませんが上海、シンガポールに比べ、会の結束度合いが強いようにも見えます。ジェネレーションの変化、女性の活躍に加えて、そこにもバルセロナ、カタルーニャだからという想いがあるように感じます。私自身カタルーニャでなければいまの自分の仕事はしんどいなあと思っていたかもしれない。それを和らげてくれる人がいて天気があって食がある。よかったと思っています。娘が海外で働きたいと言ったらバルセロナを勧めます。街に対する信頼感かな。

### 【AMICSの眼】

ビジネス人材マネジメントの視点で見たカタルーニャ人材の特質、興味深く伺いました。仕事の環境が厳しい中、夏休みには仕事メンバーでサンセバスチャン、サンチャゴ・デ・コンポステラ、その後ポルトガル、マドリッド経由で5日間2700キロをクルマで廻ってきたという体育会系?星川さん。カタルーニャ駐在のオンとオフ、それぞれのリアルを感じさせていただきました。

(取材/文 原正彦)